ＮＧヒロイン

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＧヒロイン

【Ｎコード】
Ｎ１４８６Ｎ

【作者名】
風花

【あらすじ】
まるくて大きな瞳に長い黒髪の可愛らしい少女……森川みずきは今をときめく実力派の役者だ。さまざまな役柄をこなす彼女を世間一般の人々は“ベストヒロイン”と位置付けている。そんな彼女は訳ありで、なかなかに波乱万丈な人生を送っている少女だった。

＊＊あたしの素敵な友人、うーさんに捧げさせていただきます！

その女の子は、いま誰よりも輝いてるとよく言われている。

どんぐりのような丸く大きな黒い瞳に、同じ色をしたさらさらストレートの長い髪。細く白い手足はすらりと長くて、まさに絵に描いたような正統派の美少女。

ある時は恋をしているごく普通の女子高生。ある時は江戸時代を生きるはつらつとした街娘、おしとやかな姫君。またある時は毎日を必死に生きる戦下の少女。

彼女の名は森川みずき。いま最も注目されている超実力派の“役者”である。

「ねえ、ちょっと見た！？昨日の連ドラ！」

「見た見た！スッゴい良かったよね！！さすが森川みずきって感じ」

週末休み明けの教室はいつもざわざわと騒がしい。仲の良い者達同士で休み中の出来事や今週の予定についてを話している事が多いのだが、最近は連ドラについて話している者達が圧倒的に多い。

そんな教室の中、何人かの女子生徒が窓際の机を囲むようにしておしゃべりに花を咲かせている。

「もう、あのシーンのみずきの表情がほんとに切なくって……！」

「あー、わかるわぁ。うちの兄貴、隣りで泣いてんだもん……」
その時の事を思い出したのだろう、げんなりとした顔をした少女に何人かが笑う。
「まぁ仕方ないって。あれ、ほんと迫真の演技だったじゃん」
「さすが、ベスト“ヒロイン”だよね！」
「ああ、なんか選ばれたって言ってたっけ……えっと、一番ヒロイン役が似合う女優？」
「そうそう、それ。ぴったりじゃん。ねぇ、かずき？」
1人の少女が机に突っ伏している少女の肩を揺らした。
無反応。
「……ちょっと、かずき！？またかアンタ！起きろっ！！」
叩かれた肩がばしん、と気持ちのいい音を立ててから数秒。
「んあ？」
突っ伏していた少女がようやくその頭を上げた。しかし、その目は完全に半目で今にも瞼が閉じそうな様子である。
「もうっ、やっと起きた。また遅くまでバイトしてたんでしょー？」
「あんまり無理してんじゃないよ」
かずきと呼ばれた少女の机を囲んで話していた少女達は、呆れたように苦笑して、彼女のくりくりとした短い髪をぐしゃりとかき混ぜた。

「……ん。ありがと。ところで何の話だったの？」

ふぁあと大きな欠伸をしながら問う彼女に、少女達も中断していた会話を思い出す。

「ああ。えっとね、森川みずきはまさにベストヒロインだよねって話」

「あそこまで演技の上手い人なんて、そうそういないしさぁ」

「ね、かずきはどう思う？」

興奮した様子の少女達とは対照的に、とことん眠たげな様子のかずきは欠伸で目に浮かんだ涙をこすりながら答えた。

「え。NGでしょ」

そして再び机に突っ伏す。何でよ！？と叫ぶ友人達の声を聞きながら、かずきの意識はゆっくりと眠りへと落ちていく。

……だってアレ、あたしだしな。

朧気な意識の中、むにゃむにゃと呟いた言葉は自分自身の耳にさえも聞こえなかった。

あたしの人生は、自分で言うのもなんだが波乱万丈だったりする。小さい頃に母さんは病気で死んで、父さんは新しく興した事業に大失敗。その時に、悪い人達にだまされて法を侵すような馬鹿をした

父さんが刑務所に放り込まれたのがあたしが高校1年生の時。
そして、家にひとりぼっちになったあたしに残されたのは、３５００万という多額の借金だった。

「ふーん、それで？」
「うん。だからこの仕事クビになるのは避けたいんデスよね、お給料良いし」

もきゅもきゅとパンを頬張りながら、かずきは背後に立つ女性に言った。目の前にある大きな鏡にうつるかずきは、栗色のくるくるとした短い髪を彼女の手によって次々とピンで留められているところだ。

「借金を返すためにいろんなバイトをしてきたけど、やっぱりコレが一番いいデス。ロケ弁美味しいし、余ってたら持ち帰りもおっけーだし……。なにより、仕事でご飯食べさせてくれるって素敵デスよね！」
「……だからといって撮影用の食べ物をその場で全部食べるのは止めてちょうだい」
「だって高島さん、勿体無いじゃないデスかぁー。人間、食べられる時に食べておかないと！」
「うん。今のであんたの今までの食生活がわかったような気がしたわ、私」

高島が呆れたような溜め息を吐き、ぎゅうぎゅうと髪を捻って留める手に力が入る。

「いたたたた！ちょッ、髪抜けマスって！」
「残念。もう抜けたわ」
「なにこのイジメ！？」

うふふ、と素敵に笑う高島をかずきは涙目になりながら鏡越しに睨む。その恨みのこもった視線を慣れた様子でスルーした高島は、愛用のメイクボックスから大きな筆を取り出した。

「あんたはこうやって少しくらいきつめに髪を留める方がいいのよ。眠そうな顔が少しはキリッとするでしょ？」

「……反論できませんけど、あたしの毛根が死滅したら高島さんのせいデス」

「あらあらごめんなさいねぇ。まあいいじゃない、いっつもカツラ被ってんだし」

「この仕事の時だけデスよ！」

「わかったから、黙って」

若干の理不尽さを感じながらも、素直にかずきは口を閉じた。視界に入る高島は真剣そのもので、その手は様々なメイク用品をもってかずきの顔の上をせわしなく動いている。数分後、鏡の中にはもはや見慣れた黒髪の少女がうつっていた。

「さて、これでいいでしょ。早く着替えてきなさいな」

「ありがとう、高島さん」

「あら、お礼なんて要らないわ。篠田かずきを森川みずきに変身させるのが私の仕事よ」

さあ、仕事よ。

その言葉にかずきの表情が変わる。

「いってらっしゃい、みずき」

にまっとニヒルな笑みを浮かべた高島に見送られ、笑顔で“森川み

ずき”は楽屋を後にした。

『……好き。好きなのよ、心の底から』
『……リカ』
『ねぇ、どうして？どうして私達はこんな風にしかなれなかったんだろうね』

哀しく笑う少女の頬にひとすじの涙が伝う。向き合う少年は、彼女から静かに目を逸らした。

＊＊

「今日の撮影はこれで終わりー！みんなお疲れさまー、じゃあ解散！」

ようやく今日の分の撮影が終わり、みずきは小さく息を吐いた。

「みずきちゃん！」
「あ、信幸くん。お疲れさまです」
「今回の撮影のラストシーンでの表情、スッゴく良かったよ！」
「あはは、信幸くんにはかないませんよ」

楽屋に戻る途中で声をかけてきた少年は、佐藤信幸（さとうのぶゆき）。最近注目されている若手俳優であり、今回のドラマでのみずきの相手役だ。

「ねぇ、みずきちゃん。もし良かったら、この後一緒に帰らない？一緒にご飯食べにいこうよ」

にこにこと楽しそうな信幸とは対照的に、みずきの表情は困ったようにくもる。

「あ、なんか用事でもあったりする？」

「ええっと、今日は……ちょっと」

「そっかぁ。じゃあ、また今度！暇な時とか教えてね。じゃ、また明日」

苦笑するみずきに、爽やかな笑みで信幸は自身の楽屋へと去っていった。

大きく息を吐いてみずきが楽屋に入ると、高島が待っていた。

「おかえりー」

「ただいまデス……」

疲れたように椅子に座った少女のカツラを手際良く外しながら、高島は首を傾げた。

「なに、どしたの？」

「いえ、ちょっと。……高島さん、“みずき”でいるのって疲れますネ」

ペタペタとコットンで“みずき”メイクを落としながら、かずきは力無く笑った。そんな少女の様子に高島が眉間にシワを寄せる。

「あ、なぁに？またなんかイヤミでも言われた？」

「イヤミとかそんなじゃないんデスけど、なんかみんな“森川みず

き”にスッゴく夢を持っちゃってる気がして……」
ふぅ、と吐いた溜め息はどちらのものだったか。
「あー、なるほど罪悪感持っちゃったわけね」
「いえ、そんなのは持ってないんですけど」
「……じゃあ、なに」
胡乱とした目で高島が鏡越しに睨む少女は、苦笑いを浮かべて小さく息を吐いた。
「なんか知らないうちにスゴいイメージ作られてる気がして……」
「あー、あれか。ベストヒロイン」
「あり得ないデスよね」
“みずき”じゃないあんたを知ってればね」
高島が真顔でそう言えば、かずきは今度こそ大きな溜め息を吐いた。
そんな少女の肩をぽしん、と叩いて高島は笑う。
「まぁ、仕方ないでしょ。うちのお偉いさんがそういう方針出したんだし、仕事と割り切んなさいな」
「はい……面倒くさいデスね、もぉ」
「それにどうせ外で誰かに会ったところでバレないでしょーも」
私のメイクは完璧よと笑う彼女に、かずきも笑って頷いた。
「そーデスよね。言うつもりは無いデスけど、別に秘密にしなきゃって訳でもないデスし……。だいいち、学校だって普通の公立だか

ら仕事で会うような人なんていないし」
「そうそう。仕事は仕事として割り切らないといけない事があると思うけど、プライベートではあんたはあんたらしくいていいのよ」
くしゃくしゃと頭を撫でてくる高島に、みずきは鏡越しに笑顔を返す。自分以外の人間にそう言ってもらえると、今まで心に重く感じていた何かがすぅっと溶けていったように楽になった。
「……はい。ありがとうございマス、高島さん」
「礼なんて要らないわ。カリスマ美人の高島とお呼び」
「遠慮しマス」

そして嵐は突然やってくる。
「転入生の川口信幸（かわぐちのぶゆき）です。今日からよろしくお願いしまーす」
友人達に叩き起こされて、なんとか意識を保っていた朝のホームルーム。時期はずれの転入生は、まさかの知っている顔だった。

「あの、質問なんですけどぉ……もしかして俳優の“佐藤信幸”くんとかだったり？」
「お恥ずかしながら」
「マジで！？芸能人じゃんか！すげー！」

質問されてあっさりと自身が俳優の“佐藤信幸”とクラスに明かした転入生に、かずきは内心で盛大に溜め息を吐いた。
まったくもって冗談じゃない。高島さんとあんな話をしたのは昨日の事だというのに。……面倒くさい事にはできる限り巻き込まれたくはない。
今日は1日、睡眠学習をすることに決めて、かずきは改めて机に突っ伏したのだった。

「あっれー！？篠田さんじゃん！こんな所で何してんの？」

楽屋に入る寸前、呼び止められて振り向けば例の転入生が驚いたようにこちらを見ていた。

「そこってみずきちゃんの楽屋だよね？なになに、あの子と友達だったり？」
「……仕事デス」

ふあ、とかずきは大きなあくびをして扉に手をかける。早く楽屋に入らないと撮影開始までに準備が間に合わない。高島さんにキレられる。

「ちょ、待ってよ！仕事っていったい何の？俺、ここのスタジオにずっと通ってるけど会った事ないよね」
「いつも会ってマスよ？」

「ええッ！？」
「じゃあ、また後で」
意外な言葉に驚いている信幸を残して、かずきは楽屋の中へと消えた。残された信幸はしばし呆然としていたが、撮影開始時刻が迫っている事を思い出し、自身も楽屋へと向かったのだった。

「あ、みずきちゃん！」
「信幸くん、お疲れさまです」
撮影終了後、どうにも気になる事があって信幸はみずきを呼び止めた。
「今日はＮＧ連発しちゃってごめんね」
「気にしてませんけど……どうしたんですか？信幸くんがあんなにセリフ間違うなんて珍しいですね」
きょとんとした顔で首を傾げるみずきに、信幸は苦笑する。
「実は今すっごく気になってる事があって……集中出来なくてさ」
「気になってる事、ですか？」
「うん。君に聞きたい事があるんだ」
真剣な表情でそう言う信幸に、みずきは今度こそ首を傾げた。知らず知らずのうちに、自分は何か変な事でもしていたのだろうかと訝しむ。
「あのさ……、篠田かずきって知ってる？実はその子、転入した先

のクラスメートでさ、撮影前にみずきちゃんの楽屋の前で会ったんだけど」

ああ、そういうことか。

信幸の言葉に1人納得した表情でみずきはうんうんと頷く。そんなみずきの様子に、今度は信幸が首を傾げた。

「本当はあんまり他の人に教えたくないんですけど、信幸くんだいぶ気になっちゃってるようなんで教えておきますね」

「？」

がしっと彼の手首を掴んで自身の楽屋まで連れて行く。扉を開けば、おかえりーと高島がひらひらと手をふっていた。

「森川みずきは篠田かずきなのデスよ、信幸くん」

にっこりと笑って言うも、信幸は首を傾げる。

「なにそれ、みずきちゃん……どういう事？」

「つまりはこういう事だよ、少年」

高島が半ば強引にみずきの髪を引っ張る。うぎゃ、という悲鳴と共にみずきの黒髪がぱさりと床に落ちた。

「なにすんデスか、高島さん」

「こういうのは見せた方が早いでしょ？」

「え、……ええ！？」

黒髪のカツラを取った少女は、どこかで見たことのある姿をしていた。

「篠田さん！？」
「はい。そーデスよ」
「ちょッ、嘘だろ！？嘘っていってくれ！」
「嘘も何も無いデスよ。真実はただ１つデス」
「ちょ、なにそれ。全然似てないんだけど、みずき」

あーあ。みずきが理想像か何かだったのねぇ、かわいそうに。
なんてうそぶく高島の顔は愉しげに笑っている。しかし、そんな彼女を気にかける余裕は信幸の中には既に残されていなかった。

「えええええぇぇぇッ！？」

狭い楽屋の中に響く信幸の驚愕の叫びは、わんわんとみずきと高島に耳鳴りを起こさせたのだった。

「あり得ない、あり得ないでしょ。俺のみずきちゃんがよりにもよってクラスメートだったなんて」
「まぁだ言ってるんデスか、信幸くん」

ついでに言うと、あたしは信幸くんのじゃないデス。
ずずずっとオレンジジュースを飲みながらかずきが呟けば、机に突っ伏していた信幸が顔を上げて涙目で睨みつけてきた。

「いーの！みずきちゃんは俺の理想の女の子だったんだからな！！」
「それは……ありがとうございマス」
「かずきに言ってんじゃないから！……ああ、なんで同一人物なんだよぅ～」
「仕事だからデス」
「うっさい！」

あの日から既に1ヶ月。その間には色々とあったが、なんだかんだと言いながらも仲良くなった2人である。

「学校では常に居眠り、眠過ぎてほぼ半目、おまけに実生活は巨額の借金抱えてバイト三昧……なにが“ベストヒロイン”だよ！NG過ぎるだろ！？」
「いやまったく」
「あんたも頷いてるんじゃないッ！！」

ぱこん、と頭を叩かれてかずきはじと目で信幸を睨んだ。

「そういう信幸くんだって、今回の撮影はNGの連発だったじゃないデスか。これはNG大賞に出場決定デスね」
「……あああぁ、人が気にしてる事を！」

にこやかなかずきの言葉に、信幸は盛大に頭をかきむしった。今回の事は彼にとって、かなりの不名誉だったらしい。

「まぁ、いいじゃないデスか。あの番組はギャラもいいって高島さんが言ってましたし」
「……ギャラかよ。そーだよな、時々忘れそうになるけど、あんた金に困ってんだもんな」
「ええ。切羽詰まってマスとも。あのクソ親父がッ！！」

「すまん。わかったから落ち着け」

ふうー、と2人して長い息を吐いてそれぞれの飲み物を飲む。

「まぁ、とりあえず無事に撮影も終わったし」

「評判も上々みたいデスし、またきっとすぐに次の仕事が来マスよ」

「そうだな」

「「おつかれ」」

ニッと笑い合ってグラスを傾ける。彼女は決して理想の“ベストヒロイン”なんかじゃ無かったが（むしろNGだ）、友人としてはなかなかに気の合う奴だと信幸が気付いたのは最近になってからの事だった。

「じゃ、お代は信幸くんでお願いしマスね」

「ぶッ！？」

そう爽やかに言い残して店を出たかずきも、実は彼とほぼ同じ事を思っていたなんて事実は彼女以外、誰も知らない。

end。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1486n/

ＮＧヒロイン

2010年10月10日21時04分発行